

研 究 結 果 報 告 書

所属 南京理工大学

役職 准教授

氏名 王 蕾

研究結果

研究テーマ：20世紀前半のヨーロッパ物理学者の日中旅の比較研究

一．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀前半における西洋の理論物理学が日中両国で土着化する過程の動態を体系的に分析し、両国の科学者とヨーロッパの物理学者との相互作用を探ることで、日中両国の近代物理学発展の過程に対する理解を深めることである。

二．研究のための活動内容

1. 「コペンハーゲン」というテーマで、教育講演の形式で 8 回（各 135 分）にわたって公開された。聴衆は南京理工大の修士 1 年生約 1200 人である。
2. 2023 年に日本を訪れ、東京、つくばなどの図書館、大学資料室、書店で資料を収集し、豊富な歴史資料を取得した。
3. 一部成果を整理し、2023 年にフランクフルトの国際会議で口頭発表を行った。アメリカからの教授たちは我々の研究を賞賛し、最終成果を期待していると述べた。
4. 研究論文を執筆中であり、国際学術誌に投稿する予定である。

三．研究を通じて発見したこと

訪問期間はわずか数日であったが、日本と中国の現代物理学研究は進展を見せ始めた。日本の物理学は 1930 年代から急速に発展し、1929 年のアインシュタインの講演時には新鮮で難解に思えた理論問題も、再度巨匠たちの講義を聴く際には容易に理解できるようになっていた。一方、ヨーロッパの物理学者の訪問は中国において、物理学人材の育成において最も大きな影響を与えた。訪問前、中国の物理学者の多くは米国留学派であったが、ヨーロッパの物理学者の訪問後の 1930 年代、中国では欧州への物理学留学の潮流が始まった。

四．研究を通じて見えた今後の課題

今後の課題には二つがある。第一に、ヨーロッパの物理学者の日中訪問が彼ら自身に与えた啓示を考察することである。第二に、持続可能な発展の視点から、ヨーロッパの物理学者の訪問が日中両国に与えた影響を考察することである。具体的には、日中両国の物理学の学術系譜、両国の大学における物理学科の創設、および 20 世紀に日本で物理学を学んだ中国留学生などの話題について、さらなる研究を進めることである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名: “20 世紀前半に日本に理工系を学びに行った中国人留学生と彼らの帰国後の貢献”

会議名: 第 16 回東アジア科学史国際会議(16th ICHSEA)

場所: フランクフルト大学、ドイツ

日時: 2023 年 8 月 22 日

発表者名: 王蕾 (20 分間の口頭発表)

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

“Traveling Knowledge and Translational Genealogy: European Physicists' Visits to China and Japan in the Early 20th Century” (仮題) 執筆中、Physics in Perspective ジャーナルに投稿する予定である。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)